ダブルストーリー

uniuni

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ダブルストーリー

【Ｎコード】
Ｎ２４７２Ｚ

【作者名】
ｕｎｉｕｎｉ

【あらすじ】
初めて書きます。お手柔らかに。
なぜ俺と恋人の晴香がここにいるかわからない。
生きている意味とは何だろう。
答えのない答えを探したい。見つけたい。
そんな二人の人生。

最初に（前書き）

初めて書きます。
正直うまく書けている自信はありません。
だけど、自分が読んでみたいと思えるようなものが書けたら、いいと思っています。
少しだけ、お付き合いください。

最初に

〜〜〜

「右！！」

不意に鋭い突風が木々を薙ぎ倒しながら向かってきた。

「メガエアロ！！」

パートナーの晴香がすかさずスキルを使い、木々をなぎ倒しながらこちらに向かって来る魔法を相殺する。

「目標が来たよ。数は3。くるよ。」

「了解。右からいくぞ。」

俺は腰にある剣を引き抜き、剣にスキルを這わせながら敵に向かう。

「ガイアソード！」

今回の目標であるハイゴブリンは知能も高く、連携もしてくる。
俺の前には大きめの盾とナイフを持ったハイゴブリンが立ちふさがり、後ろでブロードソードを持ったハイゴブリンが隙を窺っている。
しかし、一番警戒しなければならないのが、後方で杖を片手によくわからない言語をぶつぶつ呟いているハイゴブリンだ。
通称マジックゴブリンだ。さっきの突風もおそらくこいつのエアロ系統のスキルだろう。
このマジックゴブリンは、かなり高いレベルのスキルを使えるのが特徴だろう。

ハイゴブリンの盗伐の難易度が高いのは、連携力とこのマジックゴブリンの能力のせいである。
俺は盾を持ったハイゴブリンの側面からガイアソードのおかげで切れ味の上がった剣で切りつける。
ブチュッという鈍い音が鳴り、盾を持ったハイゴブリンを盾ごとあっさり斜めから両断する。
俺はガイアソードの効果が切れないうちにブロードソードを持ったハイゴブリンに向かい、足を切り飛ばし体勢を崩した後に首を刎ねる。

「ファイヤ！！」

後方から晴香のスキルを叫ぶ声が聞こえ、火の玉がマジックゴブリンを通過して上半身が灰になる。
うめき声も上げられずに灰になったハイゴブリンを横目に、俺は大きく息を吐き出す。
今回もまた生き残れた。この感情はいつも強く、一番強く自分の中に残る気がする。
日本の群馬に生まれて山の中で育ち、現代人よりも自然に親しみを感じているが、平和な世の中でこんな生き死にを左右する事態はあり得ない。想像つくわけがない。
こんな殺伐とした生活が始まって一ヶ月。
生々しくもあまり現実感の無いこのバカらしい世界に俺と晴香がいる理由を説明するには、一ヶ月前に遡る必要がある。
〜〜〜

一話（前書き）

よく物事には正解がないというけど、もし小説の書き方があるなら教えてほしい。
そんな今日この頃。
基本も何もあったもんじゃないな。これで小説として成り立っているか不安。

一話

「そこ右じゃない？」
「さっき通ったじゃん。レアいなかったし。」

俺と恋人の晴香はパソコンに向かっていて、少し前に流行ったネットゲームをやっている俺に、晴香がちゃちゃをいれる。
最近は部屋でこんなやり取りをしていることが多い気がする。
もちろん普通のデートなんかもするが、晴香は俺のアパート入り浸りで、大学の講義や友達と遊ぶ時以外の時間は俺の部屋にいることが多い。
そのせいかこうやって俺がネットゲームをしている姿を晴香はよく目にしているし、ゲームを見ているのが好きなようで、ネットゲームをしているときによく近く（近くというか膝の上）で座って見ている。
そのせいか、かなり内容に詳しい。ステージのレアな敵の居場所とか武器のつくり方とか、知識がなかなかコアになってきた。

それにしても俺がこのネットゲーム、「ストレートストーリー」をやり始めて早三年が過ぎた。
大学の入学当時、初めてできた友達に薦められて始めたこのゲームは、今までしてきた家庭用ゲームとは違い友達と一緒にでき、なおかつゲーム内で友達ができるという俺にとっては革命的なゲームであり、俺がハマるのにはそんなに時間はかからなかった。
このゲームにハマって、それからの俺の行動は自分でもかなり早かったと思う。
中学の時の友達に頼み、快適にゲームができる性能のパソコンを組んでもらい、経験値の多く入るアイテムや強い武器をネットマネー

で買いあさり（まあ、常識の範囲内ではあるが）、どんどん熱中していった。
まあ、最近は更新のマンネリ化が進み内容があまり面白く思えなくなってきている。
主キャラクタは常にカンストさせているが、最近ではいろいろな職業のサブキャラクタを作って楽しんでいるような状態だ。
晴香の頼みで女のサブキャラクタもいくつか作ったし、正直遊びつくしている感か強い。
今も晴香のお気に入りの女のサブキャラクタでストーリーを進めていて、いまボスを倒したことによりレベルが上がった。
晴香がいる時は女のサブキャラクタでゲームをすることが多く、入り浸っている今では男のサブキャラクタより女のサブキャラクタの方がレベルも高くなり、晴香もご満悦みたいだ。

「ねえ、もう一時だよ。そろそろ寝ようよ。」
「もうそんな時間か。明日は横浜に遊びに行くし、そろそろ寝なきゃか」
「そうだよ。久々に遊びに行くんだし、ゆっくり寝て明日は楽しまなきゃね。」
「じゃあ寝るか。布団剥ぐなよ。」
「そんなに寝相悪くないもんね。おやすみ。」

そんなたわいもない会話をして、俺たちは寝た。
そう。確かに俺の部屋の俺のシングルベッドで俺と晴香は寝たのだ。
これが俺達の見た最後の現実だった。

二話

「んん。ん？おかしいな。ベッドに陽があたることなんて・・・。え、どこ。」

顔に眩しい陽を浴びて起きた俺は、わけがわからなかった。
理由は簡単。部屋に一切見覚えがなかったからだ。
木目の鮮やかな木造の部屋で窓が一つ。ベッドとテーブル、椅子以外には何もなく、物もテーブルに林檎と梨が入ったバスケットがあるのみ。
唯一、見覚えがあるのは同じ布団で寝ている晴香だけである。

「おい。おい晴香。」
「なにぃ。もう出かける時間？」
「違う違う。マジちょっと起きろって。」
「うーん。わかったよう。おは・・・。ここどこ？」
「わかんね。俺もさっき起きたとこ。」
「・・誘拐とか拉致じゃないよね？でも縛られたりしてないしなぁ。」
「うーん。まあ、とりあえず落ち着いて状況を確認してみるか。」
「そうするしかないかな。ん？このメニューってなに？」
「メニュー？なにそれ？」
「あそこの・・。あれ動いた。なんか右上にずっと書いてあるんだよね。」
「え？あ、ホントだ。なんだこれ。メニュー。ってうお！！」
「どうしたの？！え？」
「なんだこれ。」

俺の目の前にはノート大くらいの画面らしきものが出現していた。
まるでタッチパネル式のパソコンの画面で見るようなもののようで、
突然目の前に出てきた。
薄く淡い光で包まれているそれは側面から見たらものすごく薄く、
まるで投射機で白い布に映像を写したかのような様子だ。
そこには「アイテム」「ステータス」「スキル」「スキルノート」
「錬成」といった項目があり、右上には俺の名前である「仁」と書
いてある。
「なんかメニューっていったら出たぞ！」
「メニュー。あ。ホントだ！！私も出た！！」
とりあえずためしにタッチパネルの要領で「ステータス」を押して
みるか。

〜〜
職業：剣聖Ｌ１５０、槍使いＬ７４、魔法剣士Ｌ６０、忍者Ｌ５８、
聖拳士Ｌ５１
合計Ｌ：３９３
ＳＰ：３９３／３９３
ＨＰ：１０　ＭＰ：１０
Ａ：１０　Ｄ：１１
ＭＡ：１０　ＭＤ：１０
武器：なし
防具：スウェット
〜〜

と出てきた。・・・なにこれ。
「なにかのゲーム？」
画面を見た晴香がそういうのも無理はない。正直俺もそう思った。
「防具がスウェットってことは俺のことか？ってかステータス！レ
ベルの割に低くないか？１０って。」

「うーん。私も出してみるね。」

〜〜

職業：魔道士Ｌ１１１、神官Ｌ８３、狩人Ｌ１０２

合計Ｌ：２９６

ＳＰ：２９６／２９６

ＨＰ：１０　ＭＰ：１０

Ａ：１０　Ｄ：１１

ＭＡ：１０　ＭＤ：１０

武器：なし

防具：パジャマ

〜〜

「レベルは違うけど、ステータス一緒だね。」

「同じだな。どういうことだ？」

「うーん、何でだろうね。とりあえず他のも見てみる？」

「そうだな。とりあえずスキルを・・何にもかいてないな。」

「私もだ。何もないね。」

「ほかのも見てみよう。」

アイテムもお互いなにもないし、練成にも何も書いていなかった。

ただ、スキルノートには職業項目があり、試しに仁の項目の「剣聖」を選択すると「剣技Ｌ１」や「身体強化Ｌ１」などの項目がありその隣には「必要ＳＰ１」などのことが示されていた。

試しに仁の項目の剣技Ｌ１を選択すると文字が金色に輝いた。

どうやら、ＳＰを消費してスキルを取得することができるみたいだ。

「てかさ、この項目ストレートストーリーのスキルプレートに似てない？」

確かに似ている。「剣聖」とか「魔法剣士」とか、職業に書かれているやつは全てストレートストーリーの職業と符合するし、剣技Ｌ

1って剣士の初期のスキルにあった気がする。
でも、ストレートストーリーは一人のキャラに一つの職業だった。スキルノートを見るに、俺も晴香も複数の職業を持っているみたいである。

「なんか似ているよな。そっちのスキルノートは、どう？」
「ファイヤとかアイスとか色々あるよ。ファイヤ押したらメガファイヤっていう項目でてきたし。なにこれ。ていうか、ストレートストーリーまんまじゃない？」
「だよな。剣技L1押したら剣技L2出てきたし。スキルプレートまんまだよな。」
「ごめん、混乱してきた。つまり私たちは視界の右上にメニューって書いてあって、メニューって言ったらタッチパネルらしきものがでてきて、それを開いたら「ストレートストーリー」そのまんまなスキルノートという項目と同じ職業が書いてあったと。あってるよね？」
「たぶん。合ってるはず。てかわけわからん。起きたら知らない所にいるし、変なタッチパネルみたいなのが出てくるし。なんだよこれ。」
「人生でこんなにわけがわからないの初めて。こんなに落ち着いている自分が逆にびっくりだよ。」
「ていうか、メニューの話になって話が切れていたけど、まずここどこ？」
「ううん。どこだろ？」

メニューを閉じ（メニュー。といったら閉じた）最初の疑問に戻る。しかしながら、周りを見てもさっき見た殺風景な部屋の様子しかなく、よくわからないよな。

「窓から見た感じ外は森みたいだな。他に窓から見てわかることは

ないなぁ。」
「やあ、起きたのかい。僕はベン。昨日はもう寝ていたみたいだから僕も勝手に隣のベッドで寝させてもらったよ。それにしてもいいなー。僕もパートナーが欲しいよ。一人旅は寂しいからね。」
金髪のひょろひょろした男がドアから入ってきて、いきなりそう告げた。
俺と晴香はいきなりのことにフリーズし、俺より先に復活した晴香が恥ずかしげに叫んだ。
「えぇぇ?!あなた誰よ?!寝させてもらったって、勝手に隣で寝るとかダメでしょ!!」
「ん?一声かけずに寝たのは申し訳ないけどさ。ここは旅人用に派遣会社が建てた小屋だから、宿泊は自由でしょ?そんなに怒らなくてもいいんじゃない?」
「旅人用に?派遣会社?」
「そうだよ。君たちも何かの依頼でここに来たんだろ?・・・ていうか君たち荷物は?武器も持たずに何故こんなところに?」
ベンと名乗った金髪君は、訝しげな表情でそう聞いてきたが、俺達はそれどころではない。
「依頼?武器?・・・ベンさんでいいのかな?まず教えて欲しいことがあるんだけど、ここどこ?」
「へ?ここどこって変な質問するね。ここはオイル領のイルドの森だろ?何いってんの?」
「(知らない地名だ。)そ、そうだったね。まだ少し寝ぼけていたようだよ。」
「変な人だな。まあいいや。僕はもう出るから。またいつか。」

そういってベンさん（年齢的に君か？）は、肩から掛けられる位の大きさのカバンと剣を持ち、さっさと小屋から出て行った。・・・って剣？？

「・・なあ晴香。彼、剣持ってたよな？」
「・・うん。」
「・・銃刀法違反だよな。」
「・・うん。」

マジでこれはどういうことだろう。しかも彼は俺達が武器を持っていないことに驚いていた。てことは外には危険があるということか？・・・ええええ？？！！

「こりゃまいった。迂闊に外に出れなくなったな。」
「え？なんで？」
「さっきの彼の言動的にいって、外には武器を持たないと危険な何かがあるみたいだ。くそう。彼からもっと情報が得られれば良かったんだが。」
「え？え？なにそれ？どういうこと？え？」
「とりあえず落ち着け。晴香。大丈夫だから。」

一体何が大丈夫なのか自分でもさっぱりだが、晴香が混乱しては何かと困るだろうから、とりあえず落ち着くのを待つか。

「大丈夫？そう、大丈夫だよね。ありがとう。」
「おう。じゃあまあ、今わかっていることをひとまず確認しよう。」

今わかっていることは、ここはオイル領のイルドの森というところで外は武器がないと危ない。地名からいってここは多分日本ではないだろう。あと、この小屋は派遣会社というところが建てたらしい。

メニューというとゲームのウィンドウみたいなものが現れる。メニューにはいろいろな項目がある。ということくらいだろう。

「うーん。だとしたら今調べられるのはメニュー位かな？他のは調べようがないよね。」

「そうだな。メニュー。・・お！なんかステータスが上がってる！」

「え！・・ホントだ。全体的に上がってるね！なんでだろう？」

「・・・多分スキルノートの剣術Ｌ１を取ったからだ。次に出た剣術Ｌ２を取ったらまた上がったから間違いない。・・・晴香。これはホントにバカみたいな想像かもしれないけど、ここはゲームの中かゲームみたいな場所なんじゃないかな？」

正直今のところの状況的にはその可能性は低くない。普通に剣を持っている人。メニューなんていう画面（みたいなもの）。地名。さっき会ったベンさんの言動。

正直ドッキリとかじゃない限り十中八九この推測は合っているだろう。

「・・・やっぱり今のところはその可能性が高いかもね。」

晴香もおっとりしているがバカではない。現状をみてその可能性が高いのはわかったようだ。

「とりあえず。今のところはスキルを取ってステータスを上げといた方が無難だな。このステータスが本当に身体能力を上げてくれることを祈ろう。」

「・・・仁。この世界は私たちの知らない世界で間違いないみたいだよ。」

「はぁ？晴香何言って・・。それなに？」

「ファイヤだってさ。さっき取ったスキル。言ってみたら出たんだ。

」
・・正直これが一番驚いたかもしれない。晴香の右手の上には火の玉が浮いていた。赤く燃える火の中に青い部分があり、明らかにガスコンロとかでみる『火』そのものみたいだ。

「・・晴香。それ熱くないの？」
「不思議と熱くないのよね。てかこれどうしよう。消し方わからないんだけど。」
「マジか！うーん。とりあえず外に投げるのが無難か？晴香できるか？」
「やってみるね。」

そんなかわいく『やってみるね。』とか言ってるけどそれ威力未知数なんだからそんな軽くいうｎ（どかーーん）・・・この威力あり得なくね？半径２Ｍ位のクレーターできたけどあり得なくね？

「・・・ははぁ。ごめん。こんな威力出るなんて思わなくて・・。あのぉ、本当にごめんね？」
「・・オッケェェイ。とりあえず現実逃避は後にしよう。何この威力。あはははは。とりあえず初期ステータスでこの威力なら自衛には問題ないはず。ってか、この威力で魔法使って生き残れないなら俺達は生きていけないから、大丈夫。あはははは。」
「・・・お願い仁。壊れないで。マジお願い。とりあえず武器がない以上、魔法が私たちの生命線だよね。どんな敵が出るかわからないけど、この威力ならきっと生き残れるはずだよね。」
「・・・ホントに日本じゃないんだな。戦争のない日本に生まれた俺達が魔法とか。あはははは。こんな皮肉はないよな。あはははは。」
「仁、戻ってきて。ホントに勝手にスキル使ってごめんなさい。大

丈夫？？」

大丈夫なわけあるかぁぁぁああ！！・・・はぁ、どうするか。

三話

とりあえずメニューをいじってわかったことがある。
基本的には「ストレートストーリー」のスキルプレートとメニューのスキルノートは同じものである。
しかしながらステータスの面でいろいろ違う点もある。
ステータスを上昇させる効果のスキルは名前の最後に「技」が付くスキルであることが分かり、基本的に最後に「技」が付く名前のスキル（剣技や槍技など）のステータス上昇効果は重複しないが、複数職を持っているため例外的に重複してステータスを上昇させるスキルがあり、またその上昇値はその職のレベルに対応しているようだ。
分類として「剣技、槍技などの直接攻撃することを目的とした物理技系」、「魔技」、「聖技」の三種類に技系は分けられ、その三種類はステータス上昇が重複することが判明して、ステータスは最初と比べるとかなり値が上昇した。
また、これによってＳＰの無駄使いが無くなり、攻撃スキルや回復スキルなど効率よくスキルを取ることができることとなった。
幸いにもファイヤなどの詠唱するタイプのスキルは、二人とも自分の職にある分は取得することができた。
武器のない俺達にとっては生命線となる魔法系スキル。これをできるだけ取ることができたのは本当に助かるし、生存率が上がるだろう。
というかものすごく便利な項目があった。それは「錬成」という項目だ。
その項目には自分の所持している物が表示されており、メインやサ

ブなどの選択画面によってその物を選択すると錬成することにより新たに作ることができる物が表示される。
たとえば、俺達がさっきまで寝ていたベッドのかけ布団と俺が着ているスウェットを選択したら「布のジャケット」（必要ＭＰ１０）、「厚手の服」（必要ＭＰ５）などの項目が出た。
どうも「布のジャケット」の方が「厚手の服」より必要ＭＰが多いことから上位の装備品らしい。
布のジャケットを選択すると今度は「布のジャケット＋１」（必要ＭＰ２０）、「布のジャケット＋２」（必要ＭＰ３０）、などの項目が出てきて、どうもＭＰをかければかけるほど上位の装備品になるようだ。
正直、今俺達が着ているスウェットとパジャマという薄着では寒い。ホント寒い。
小屋の中でも寒いのだから外に出ることなんかマジで無理！！な状況である。
とりあえず、俺のスウェットはかけ布団と合わせて「布のジャケット＋１０」（必要ＭＰ１１０）を作ることにした。
ピカッとした光とともに右手に持ったかけ布団と着ているスウェットが消えて、俺はそれなりに暖かそうな服一式を着ていた。
さっきまで着ていたスウェットと違い、ぴちっとした茶色のズボンに白いシャツ、その上にズボンと同じ茶色で布地のジャケット。ちょっとオシャレでいい感じである。

「仁いいなぁ。私もなんかかわいいの欲しいなぁ。」
「じゃあ、晴香も服錬成しなよ。ってかしなさい。寒いだろうし、何よりその格好はアカン。」

・・・正直言って晴香は結構かわいい。なぜこんなかわいい子が俺と付き合ってくれたのか全然わからないくらいである。そんな晴香のパジャマ姿は外を歩くには少々セクシー過ぎである。

「そうかなぁ。それじゃあ、私は、枕と毛布貰うね。」
晴香は錬成にパジャマを使わないみたいだ。枕と毛布が光り輝き、光がなくなったときには厚手の布とかが晴香の腕の中にあった。
「布のローブ＋１１だって。色も赤くてかわいいし、いい感じだね。」
「ああ。他に錬成するものは・・・。ん？これは。」
果物の入ったバスケットの中にはステーキを食べるときに使うようなナイフが置かれていた。おそらく皮を剥くために置かれていたのだろう。
「これで武器作れないかなぁ。」
「できそうだけど、なにと合わせるの？」
それが問題だよなぁ。ん？・・・これは灯台もと暗しだ。
「もう布団とかも勝手に使ってるし、テーブルとか使ったらダメかな？」
「いいんじゃない。やっちゃえ。」
オッケイッ。ナイフとテーブルっと。これでできるのは「木刀」（消費ＭＰ５）「ショートソード」（消費ＭＰ１０）「槍」（消費ＭＰ１０）か、残りＭＰは９７。さっきは９６だったから１回復したみたいだ。これでＭＰは時間が経つにつれて回復することもわかったし、後は武器をどれにするかだよな。剣聖の剣技Ｌ１０を取ったから槍は論外。多分個体としてはショートソードの方が強いけど、＋補正観点からしたら木刀が＋１８、ショートソードが＋８と木刀

の方がかなり高い。この補正がどうかかわるかが問題だ。・・・まあ、正直日光とか行ったときに１０００円の木刀とか買っていたし、木刀の方がいいかもな。・・・あれ？

「晴香。今ＭＰ減ってる状態だけど、全回復してから錬成した方が強く錬成できるみたい。そうしてもいいかな。」

「いいよ。太陽的にまだ午前中みたいだし、少しゆっくりしようか。」

「あと、ステータス的に晴香の方がＭＰが１００多いし、晴香が錬成してくれ。木刀で最大まで＋つけてくれ。」

「了解。でさあ、一昨日学校でミキがさぁ。・・」

俺達が他愛もない話をしていると体感で１時間くらいで晴香のＭＰは全回復した。

ＭＰは体感１時間で２００くらい回復するようだ。これも覚えておこう。

「じゃあ錬成するね。・・・ん？」

「どうした？」

「木刀＋２０の次に魔木刀って表示になったよ。＋は１９まであるかな。」

おそらく魔木刀は木刀の上位武器だろう。そっちの方がいいな。ていうか、やっぱり晴香のＭＰはすごく多いな。俺の１．５倍とかすごいわ。

「じゃあ、魔木刀＋１９を錬成してくれ。それでＭＰがある程度回復したら外に出てみよう。街とか人のいる場所まで行けたらいいんだけどね。」

「わかった。とりあえず作るね。」

ナイフとテーブルが光り輝き、黒くて長めの木刀が現れた。持つところにいくつか六芒星が赤く刻まれていて、柄から見るに鉄芯が入っているようだ。

「なんかかっこいい木刀だね。黒いところは家にあった木刀に近いよね。」

「・・・かっこいい！！マジかっこいい！！」

「良かったね。私は職業的に持っていなくても平気みたいだけど、仁は持っていた方がいいよね。」

そうなのである。晴香の職業は魔道士、神官、狩人の三つであるが、その三つは総じてレベルが高い。魔道士と狩人に関してはＬ１００を超える最上位職である。ちなみに俺のＬ１００以上は剣聖のみである。

ていうか晴香の一番の強みは魔道士、神官というある一点に特化した職業と狩人というバランスも良く素早いという職で、素早く回復系スキルや魔法系スキルを使えるというところである。

・・・まあ、あくまでこの世界がストレートストーリーと同じような世界であるとしての推測ではあるが。

要するに、晴香は今のところ強い魔法があるから絶対に武器が必要というわけではないということだ。

逆に俺は武器が必須だ。

魔法剣士と聖拳士のおかげで魔法系スキルと回復系スキルも使えるが、中級レベルのスキルまでしか取れずＭＡも少ない、魔法だけで大丈夫とは言えないだろう。

それに俺は職業を５つ持っているがレベルが高いのは剣聖Ｌ１５０のみで、他は平均して低い。

どう考えても剣を使う必要があるだろう。

「とりあえずＭＰが回復したら外に出てみよう。街とかに行けるようなら行って、行けないようなら戻ってこよう。」
「そうだね。」
太陽が真上に来た時に晴香のＭＰは大体回復した。さて、そろそろ外にでるか。
「なにが外で起こるか分からないから、用心していこうな。」
「あと、とりあえず魔法がどの程度使えるか確認しようね。」
「了解。」
目の前に広がる木々を前にして、二人して一緒に息をのんだ。
「よし！行くぞ！」
「うん！」
バキッと小枝を踏みしめて俺達は前に踏み出した。
さて、何が待っていることやら。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2472z/

ダブルストーリー

2011年12月11日01時50分発行